

少女マンガ雑誌における「外国」イメージ

—1960～1970年代の『週刊少女フレンド』分析より—

増田のぞみ・猪俣紀子

“Foreign Countries” Images in Shojo Manga Magazines:
An Analysis of “*Weekly Shojo Friend*” in 1960～1970’s

MASUDA Nozomi and INOMATA Noriko

Abstract: This paper examines the girls’comic magazine *Weekly Shojo Friend* from 1960s to 1970s, focusing on the content composition of the magazine and the countries in which comics were set in, and analyzes the changing roles of girls’comic magazines during this period. Regarding the composition of the contents, the author discovered that information on stars and idols, and articles on fashion decreased, and that the magazine was starting to pursue its specialty as a comic magazine. The most frequently depicted “foreign country” was America, and compared to *Weekly Margaret*, there were less comics set in Europe. The manner in which “foreign countries” are depicted in girls’comics differ between magazines. In analyzing girls’comic magazines, it is necessary not only to consider them in association to other medias, but also the difference between the magazines themselves. However, although each magazine has its distinct color, both *Weekly Shojo Friend* and *Weekly Margaret* include comics of diverse styles. Girls’ comic magazines likely provide readers the chance to be exposed to diverse types of heroines/heroes and stories.

要旨: 本稿では、1960年代から1970年代にかけての少女マンガ雑誌『週刊少女フレンド』を対象とし、雑誌のページ構成と「外国」が舞台となった作品に焦点をあて、その時期にみられる少女マンガ雑誌の役割の変化を考察した。ページ構成としては、マンガのページ数が増え、スターやアイドルの情報、ファッションを扱う記事などが減り、「マンガ雑誌」としての特徴を明確化していく過程が確認できた。描かれる「外国」としては、アメリカが最も多く、『週刊マーガレット』と比較すると、ヨーロッパが舞台になることが少ない。少女マンガにおいて、それぞれのイメージを担った「外国」の取り上げられ方は雑誌ごとに異なる。少女マンガ誌について考察する際には、他のメディアとの関連とともに、少女マンガ雑誌間の差異にも注目する必要がある。ただし、雑誌ごとに異なるカラーを持ってはいるが、『週刊少女フレンド』においても、『週刊マーガレット』においても、多様な作風が混在している。少女マンガ雑誌は、読者にさまざまなタイプの主人公や物語に触れる機会を提供していると考えられる。

はじめに

筆者らは、戦後の少女文化、少女向けメディアの歴史のなかで少女マンガが果たしてきた役割を問い直す作業として、少女マンガ雑誌が何を描き、読者に何を提示してきたのかを明らかにしたいと考え、少女マンガ雑誌の分析を続けている。その手始めとして、前回は1960年代から1970年代にかけての『週刊マーガレット』（集英

社）を取り上げた（増田・猪俣 2016）。

続く本稿では、同じく戦後の代表的な少女マンガ雑誌である『週刊少女フレンド』（講談社）を分析対象とし、1960年代から1970年代にかけてのページ構成の変化やマンガ作品の中で描かれた「外国」イメージについて考察する。

1. ページ構成の変化

今回の調査では、基本的には『週刊少女フレンド』の1967年、1969年、1971年、1973年、1975年、1977年の各1月、4月、7月、10月の最初の号を対象とし、適宜他の号についても参照した¹⁾。雑誌全体のページ数は1967年1月には236ページであったが、1977年1月には338ページへと大幅に増え、厚みが増している。ではまず、誌面の構成がどのように変化したのかをみていきたい。

1967年、1969年、1971年、1973年、1975年、1977年の各1月号について、それぞれのページを内容によって分類し、その構成を調べたところ、以下の表および図のようになった。分類は、①マンガ、②スター・アイドルの情報、③おしゃれ・ファッション関連記事、④小説・実録もの（ノンフィクション）、⑤読者関連コーナー（ファンクラブ、編集部便り）、⑥その他読み物記事（占い、クイズ、その他）の6つである。

表1 『週刊少女フレンド』におけるページ数の変化

	マンガ作品	スター・アイドル情報	おしゃれ・ファッション関係	小説・実録	読者関連コーナー	その他・読み物記事
1967年	167	12	3	22	7	6
1969年	142	8	3	24	3	6
1971年	244	10	2	8	9	7
1973年	222	22	0	4	9	7
1975年	256	26	0	0	9	0
1977年	284	6	2	5	4	4

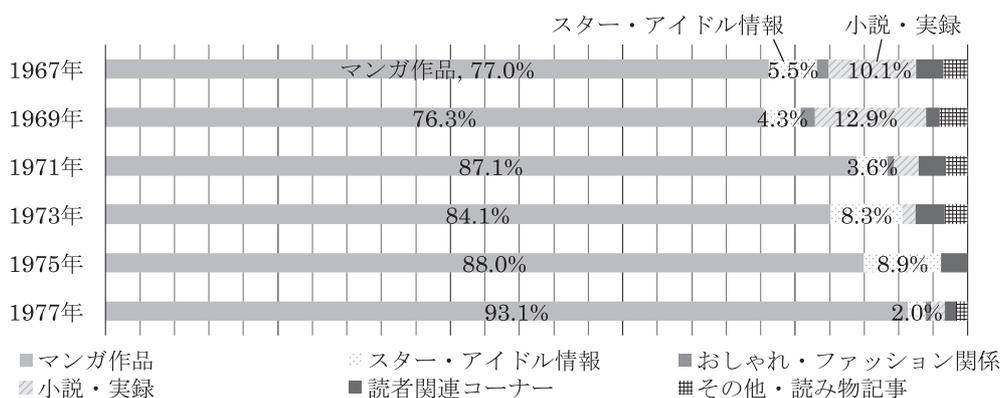


図1 ページ構成の変化

①マンガ作品

マンガのページ数は、1967年1月には合計167ページだったが、1977年1月には284ページとなった。雑誌全体に占めるマンガページ数の割合は、77%から93%へと変化した。1作品ごとのページ数が増えており、1960年代後半には15ページ前後の作品がほとんどであったが、1970年代後半には30ページを超えることも珍しくなくなっている。雑誌全体のページ数を押し上げているのは、マンガのページ数であることがわかる。

1) 調査にあたっては、甲南女子大学文学部メディア表現学科が所蔵する少女マンガ雑誌コレクション、大阪府立図書館国際児童文学館および増田・猪俣個人が所有する資料を利用した。所蔵のないものに関してはなるべく発刊日の近い号を閲覧した。マンガ作品としては、4ページ以上のストーリーマンガ作品すべてを対象としている（増田・猪俣 2016）。

1960年代後半には、ちばてつや、今村ゆたか²⁾などの男性作家が活躍しており、赤塚不二夫をはじめとするフジオ・プロによる連載作品もみられる。1967年には各号3~4名の男性作家が連載していたが、1977年になると男性作家はおかのきんやによる短いページ数の作品のみとなっている。1960年代後半は、細川知栄子などの戦前・戦中生まれの人気作家の活躍とともに、里中満智子など戦後の第一次ベビーブームに生まれた女性作家たちがデビューし、力を付け始めた時期にあたる。とくに、里中は1964年に講談社まんがが賞受賞作「ピアの肖像」で、『週刊少女フレンド』にて「十六さいの、おねえさんのかいたまんが!」というコピーとともにデビューし、多くの読者に強い印象を残した。その後、数多くの作品を描きながら看板作家へと成長を遂げ、1970年代半ばには「あした輝く」や「アリエスの乙女たち」などの代表作を連載している。作者と読者の距離が近づき、女性作家の手によって年齢の近い女性読者に向けて作品が描かれるようになったこの時期は、少女マンガの「成立」、あるいは「成熟」や「進化」とみなされることが多い。後述するように、1970年代後半には里中満智子や庄司陽子、大和和紀といった看板作家の活躍とともに吉田まゆみなど新しい世代の作家の登場もあり、多様な作品が生み出されるようになった。

②スター・アイドルの情報

スターやアイドルの情報としては、1960年代後半にはウィーン少年合唱団の記事が散見されるほか、森田健作や千葉真一などの映画スターや歌番組に登場する歌手など、映画やテレビ番組のスターに関する記事が目立つ。また、1967年にデビューしたザ・タイガースをはじめとして、1960年代後半にはグループサウンズの人気が高まり、「ザ・タイガースの友情物語」といった小説仕立ての読み物が連載されている。また、読者が好きなスター（歌手・テレビタレント・映画俳優など）の名前を書いてハガキで投稿して選出する「スターベストテン」という企画では、1969年1月1日号において、「ジュリーがだんぜんトップ!」として沢田研二が3,524票を集めて第1位、萩原健一が第2位となっており、沢田研二はこの号の表紙を飾っている。

その後、1970年代に入ると郷ひろみ、西城秀樹、野口五郎らの「新御三家」、フォーリーブスやジャニーズ・スペシャルなどの男性グループアイドルのほか、天地真理や桜田淳子などの女性アイドルたちが誌面を飾るようになる。郷ひろみはとくに大きく取り上げられており、当時17歳だった1973年4月10日号は「郷ひろみ大特集号」と名付けられたほか、郷や西城がたびたび表紙を飾っている。「郷ひろみとともに」といったデビューまでの経緯やこれまでの苦労などが物語としてまとめられた読み物も連載されていた。

スターやアイドルは雑誌の表紙を飾り、グラビアページにカラーで登場することが多く、誌面構成からは主要な記事として扱われていたことがわかる。ヒット曲や新曲の歌詞を紹介するページ、スターへの密着取材やインタビューなど多様な記事が展開されており、雑誌の選択にあたって読者にとって不可欠な情報となっていたと考えられる。こうしたページは1970年代後半には減っていき、少女マンガ誌としての特徴がより明確になっていくこととなった。

③おしゃれ・ファッション関連記事

おしゃれやファッション関連の記事としては、雑誌の巻頭グラビアにおけるコーディネートの紹介や、おしゃれ小物を紹介する記事などがあげられる。

「東レ・キックスター 少女フレンドファッション」と題されたグラビアでは、アメリカの国旗の前で少女モデルたちがポーズをとっており、それらの洋服は全国の東レの店舗で購入できると紹介されている（1969年9月23日号）。また、高橋真琴によるプリンセスのイラストがプリントされたアサヒ靴のナイロン製の運動靴の広告など、商品化されたファッション小物が複数登場していることがわかる。広告にもこうしたファッション小物のほか、牧美也子のイラストがケースに描かれた三菱鉛筆の色鉛筆や電動シャープナー、リカちゃん人形やタミーちゃん人形のような玩具が頻繁に掲載された。とくにリカちゃんに関しては、1968年から1969年にかけて「リカちゃんトリオ」という細野みち子によるマンガ作品も連載されるなど、少女マンガ作品と商品とが直接結びついている点に特徴がある。

マンガ作品とファッションの関連としては、1971年連載の「モンシェリ CoCo」（大和和紀）に代表されるように、華やかなファッション界を舞台にデザイナーやモデル（マヌカン）らの活躍を描く作品が複数みられる。お

2) 今村ゆたかは貸本マンガなどで活躍した今村つとむの息子で、『週刊少女フレンド』に作品を描いている。『週刊マーガレット』において「ハッスルゆうちゃん」などを連載した今村洋子の弟である。

しゃれやファッション関連の情報も、読者が憧れ、求めているものと考えられる。ただし、これらの記事についても、1970年代後半にはページ数が減っていくこととなる。

④小説・実録もの(ノンフィクションなど)

1960年代においては、小説としては、過去に公開された有名な映画作品を紹介する「フレンド名作映画劇場」、近く公開される映画や人気のテレビドラマを書き起こした「映画物語」や「テレビ物語」などが、俳優の写真とともに掲載されることが多い。日本の映画スターが登場する邦画の場合もあれば、「キューリー夫人」(1969年4月)などのハリウッド映画や、アメリカのテレビドラマとして「奥様は魔女」シリーズ、修道尼が活躍する「いたずら天使」(1969年1月)など幅広い。映画やテレビドラマを原作とした小説と大判の写真とで構成されるこれらのページも、マンガ雑誌と他のメディアとの関連を考えるうえで注目される。『週刊少女フレンド』においては、アメリカの映画やテレビドラマが多く取り上げられていると言える。

一方、1960年代後半の誌面でノンフィクションとして目立つのは、「年末特別ニュース かなしくてもお正月はくる②みどりちゃんきいて このミサ曲を」(1969年1月1日号)、「ニュースストーリー ある少女の自殺」(1969年4月8日号)に代表されるような病気や貧困などで不幸な最期を遂げた少女たちを紹介する物語である。これらの記事は4ページほどで構成され、少女たちがおかれた状況や心情が詳しく書かれている。こうした実録や小説のページ数が、1970年代に入ってから大きく減っていることがわかる。

⑤読者関連コーナー(ファンクラブ、編集部便り)

読者関連のページとしては、読者からの手紙や詩、イラストの投稿などで構成される「フレンド=ファンクラブ」や「こちら編集部」などのページがある。1960年代後半から1971年頃までは2ページのみだった「フレンド=ファンクラブ」だが、投稿中心の「ファンクラブ」は編集部からのお知らせが多く掲載される「こちら編集部」に変わり、1975年には5ページ前後とむしろページ数は増えている。連載を担当しているマンガ家のインタビューやイラストなどで、仕事場の様子や近況を知ることができたり、編集者とのやり取りを垣間見ることができたり、読者と作家・編集部をつなぐコーナーとなっている。

⑥その他読み物記事(占い、クイズ、その他)

その他の読み物には、占いやクイズなどさまざまな記事が含まれる。注目されるのは、異性への関心やからだの悩みの相談など、読者である少女たちの思春期特有の悩みや不安に寄り添っている点である。

例えば、「愛と性の悩み 青春カウンセリング」というコーナーでは、交際の申し込みを断ったのにあきらめてくれないと困っている「きれいな男の子に好かれて」という中学2年生の相談や、まだ生理がこないことを気にしている「わたしはおとおんな?」という小学6年生の悩みに対して医学博士や社会心理研究所のスタッフが答えている(1973年10月23日号)。この「青春カウンセリング」のコーナーは1975年にもみられた。「恋愛・SEX・友情・学校・家庭・進学・就職・ファッションなどについて、わからないこと、こまったことをお送りください。専門の先生がたが、あなたの身になってご相談にのります」という投稿募集があり、思春期の悩みに答える内容となっている。

また、異性への関心を記事にしているページも多くみられた。「あなたのセックス危険度は?」(1971年4月6日号)と題された「子どもからおとなへと成長するあなたに、性の危険がせまっているのです。かれの行動、そして、あなた自身の行動にも気をつけましょう」と警笛を鳴らす記事もみられる一方で、ボーイフレンドとの接触をより積極的に勧める記事もみられる。「ちょっとエッチな室内ゲームはいかが?」(1973年1月9日号)では、「かれにボディ・タッチするチャンスなので〜す」と、「ボールとマリー」「おでこでキス」といった男女が接触するゲームを解説している。

この時期には、文通相手を募集するページの柱の部分に掲載された「お友だちになりましょう」というメッセージのなかにも、「小学六年生のかた」「六年生でおませなかた」といった同性の文通相手を求めるメッセージとともに、「渡辺茂樹さんのファンで男子のかた」、「中学二年生の男子のかた」、「少女フレンドの愛読者で手紙をかく気のある男子のかた」などボーイフレンドの募集も散見される(1969年4月8日号)。ヘアケアの情報に関しても、「BF(ボーイフレンド)が注目しています!ヘアはあなたのチャームポイントです」(1971年10月12日号)と題されるなど、異性への関心は前面に押し出され、誌面ではそれが肯定されていると言える。

以上のように、①～⑥までの各項目をみてきたが、雑誌全体のページ数とともにマンガのページ数が増え、ファッションやアイドルの情報、小説などを含めた読み物のページが減っていくというページ構成の変化は、少女マンガ雑誌が「マンガ雑誌」としての特徴をより明確にしていく過程として捉えることができる。

難波功士は、このような1960年代から1970年代にかけての少女マンガ雑誌の変化について、「表紙のスターやアイドルの写真がマンガへと変わり、読物・記事が消えていったことは、少女マンガ誌への純化がいつそう進んだことの証左であろう。七〇年代にはファッション雑誌や芸能雑誌の創刊が相次ぎ、「少女にとっての総合誌」が成立しにくい状況が始まっていた」（難波2001：203）と指摘している。

少女マンガ雑誌のページがマンガだけで占められるようになると、当然ながらそれまでのようにスターのグラビアやファッションの情報も含めて読者を満足させるのではなく、マンガ作品の魅力だけで読者を惹きつけなくてはならない。後述するように、新たな世代の作家の登場とともにベテラン勢も活躍を続け、少女マンガが提示する世界観が多様になったことが、こうした少女マンガ雑誌への「純化」を可能にしたと考えることができるだろう。

2. 描かれる「外国」の違い

今回の調査では、以前に行った『週刊マーガレット』の調査結果と比較できるよう前回の調査に倣い、1967年、1969年、1971年、1973年、1975年、1977年に刊行された『週刊少女フレンド』の1月、4月、7月、10月の月初めの号を対象とし、マンガ作品の舞台となった国を調べている。

2-1 作品の舞台となった国

『週刊少女フレンド』のマンガ作品のなかで、舞台となった国を各号ごとにまとめたものが表2であり、前回調査した『週刊マーガレット』の結果が表3である。ここでは『週刊少女フレンド』と『週刊マーガレット』の二雑誌の比較もしながら結果を考察していく³⁾。

表2から、『週刊少女フレンド』で調査を行った6年間、計24冊のなかで日本を舞台にした作品が168作品と

表2 『週刊少女フレンド』掲載マンガ作品の舞台となった国

	日本	フランス	アメリカ	イギリス	インド	スペイン	オーストラリア	ドイツ	イタリア	アフリカ	レバノン	西洋だが国不明	どこの国か不明	連載作品数
1967年1月	7											3		10
4月	11													11
7月	6		1										1	8
10月	3	1	2	1						1				8
1969年1月	6	1	1									2		10
4月	9		1											10
*7月	6		3									1		10
*10月	7		2											9
1971年1月	6	1	1											8
*4月	7	1	3											11
7月	8	1											1	10
10月	10	1										1	1	13
1973年1月	5	1	1	2					1					10
4月	8			1										9
7月	5	1	1								1			8
10月	7											2		9
1975年1月	5		2											7
4月	7	1	1											9
7月	4	1	2											7
10月	8													8
1977年1月	9											2		11
4月	8	1										1		10
7月	7											3		10
10月	9			1								1		11
計	168	11	21	5					1	1	1	16	3	227

3) 各号1, 4, 7, 10月号を基本としているが、参照できなかった号に関しては月の箇所にはアスタリスクを付した。表2, 1971年4月については実際に調査した号は5月、表3の1967年4月についても実際に調査した号は5月となっている。

表3 『週刊マーガレット』掲載マンガ作品の舞台となった国

	日本	フランス	アメリカ	イギリス	インド	スペイン	オーストリア	ドイツ	イタリア	アフリカ	レバノン	西洋だが国不明	どこの国か不明	連載作品数
1967年1月	5	1				1						1		8
*4月	7						1					1		9
7月	7		1	1								1		10
10月	7	1	1									1		10
1969年1月	8											2		10
4月	4			1								5		10
7月	6			1								3		10
10月	6		1	1								1		9
1971年1月	7		2									1		10
4月	10		1											11
7月	7	1	1	1										10
10月	9		1											10
1973年1月	3	2	2		1							2		10
4月	6	2	1									1		10
7月	7	2	2									1		12
10月	9	2	1											12
1975年1月	9	1				1		1						12
4月	10	1	1					1						13
7月	7	1	1	2				1						12
10月	9	1		1									1	12
計	143	15	16	8	1	2	1	3				20	1	210

最も多く、全体の約74%を占めた。次いで「アメリカ」が21作品で約9%、「西洋だが国不明」が16作品、「フランス」が11作品、「イギリス」が5作品、「イタリア」、「アフリカ」、「レバノン」、「どこの国か不明」はそれぞれ1作品であった。

外国を舞台とする作品は56作品であり、約25%が外国を舞台にした作品といえる。その外国を舞台とした作品のなかで、「アメリカ」、「フランス」、「イギリス」、「イタリア」、「西洋だが国不明」という「西洋」を舞台にした作品は54作品あり、全体の約96%を占めている。「外国」といっても描かれるのは「西洋」の国に大きく偏っていることがわかる。また西洋の国の中でも「アメリカ」が約39%を占め、次いで「フランス」が約20%と併せて59%程度となっており、この二国がその他の国の登場回数と比べて圧倒的に多く用いられていることがわかる。この時期の少女マンガで「西洋」を舞台にすることは、前回の調査において、それまでの「少女マンガの湿っぽさに対抗するべく生まれてきた想像力の遊びによるハッピーランド」（米沢1980=2007:147）という側面があったこと、「外国」へのあこがれが少女誌自体のモチーフだったこと（米沢1980=2007:147）、まだ海外旅行も一般的でない時代に、少女読者たちに「次の方向を指し示す」という啓蒙的な意味もあったことが確認されている（増田・猪俣2016）。次に前回調査した『週刊マーガレット』の結果を用いながら『週刊少女フレンド』の外国舞台作品数を比較していく。

2-2 『週刊少女フレンド』と『週刊マーガレット』の比較

『週刊マーガレット』の調査は、表2の調査から1977年分を除いた5年分となっている。まず共通点から見ていく。『週刊マーガレット』でも日本舞台の作品は全作品中の約68%であり、『週刊少女フレンド』でも7割程度が日本舞台の作品だったため、両誌において、日本が最も多い舞台となっていることがわかる。『週刊マーガレット』では次いで「アメリカ」16作品、「フランス」15作品、「イギリス」8作品、「ドイツ」3作品、「スペイン」2作品、「オーストリア」、「インド」、「どこの国か不明」各1作品という結果であった。作品全体のなかで「外国」が舞台となったものは67作品で全体の約32%を占めていた。『週刊少女フレンド』は25%であるため、『週刊マーガレット』よりも若干外国舞台の作品が少ないが、全作品の3割前後を外国舞台の作品が占めているといえる。『週刊マーガレット』の外国を舞台とする作品のなかでは、「インド」が1作品と「不明」1作品のほかは、すべてアメリカとヨーロッパの国々で外国作品中の97%を占めた。『週刊少女フレンド』も96%であり、二誌とも外国舞台の場合のほとんどが「西洋」という共通点が見られた。また、「西洋」の国々のなかでの分布に関して『週刊マーガレット』でも「アメリカ」と「フランス」で約48%を占めている偏りがみられ、この点は二誌の共通傾向であるが、『週刊少女フレンド』の割合は約59%であり、『週刊マーガレット』と比べて「アメリカ」「フラン

ス」へより集中している傾向がみられた。

二誌の相違点としては、まず「アメリカ」と「フランス」の割合の違いがあげられる。『週刊少女フレンド』は外国舞台の作品のなかでも「アメリカ」が約39%、「フランス」が約20%でアメリカ舞台の作品はフランスの約2倍だったが、『週刊マーガレット』では「アメリカ」が16作品、「フランス」が15作品とほぼ同数であった。フランスを舞台とした作品を多く描く竹宮恵子は、1970年代の少女マンガにヨーロッパを志向したものが多かったことについて、「ともかく私は、ハリウッド的なアメリカ文化よりもヨーロッパ文化のほうに魅力を感じていた。もしかしたらそれは、一般の人々にも合った感覚なのかもしれない（竹宮2016:120）」と述べ、その理由を「日本と同じような歴史的資産があるヨーロッパに親しみを覚えた。自分たちの心情に寄り添いながらもアメリカ以上に歴史を感じられて、奥深い様式美で憧れを十分に満たしてくれるもの。その答えがヨーロッパの国々だった」とし、アメリカよりもヨーロッパへシンパシーを感じていたことを記している（竹宮2016:122）。しかし実際にマンガの舞台として設定された外国は『週刊少女フレンド』に関してはアメリカが圧倒的に多い。アメリカを志向する読者は、志向に合わせて棲み分けを行っていたことも考えられる。

『週刊マーガレット』では1973年以降になくなっていった「西洋だが国不明」設定は、『週刊少女フレンド』においては1977年にも登場する。その理由として、この年に「メルヘンコミック」とキャッチコピーが付けられた阿保美代の5ページの短編作品が毎号掲載され、どこの国か特定できないが西洋の童話のようなストーリーが描かれていたこと、また、あまねかずみや加藤はるみといった新人作家の読み切り作品の舞台として西洋が描かれていたことの影響が大きい。これは雑誌としてのジャンルの多様性、新人の読み切り作品としてのまとまりを考えた上での選択と考えることができ、この選択は少女の憧れとの関連よりも『週刊少女フレンド』の編集方針と考えられる。このような相違点は当時ライバルであった『週刊マーガレット』と『週刊少女フレンド』の差異化の中でそれぞれに起こっていった変化とみることができる。

2-3 アメリカの描かれ方の特徴

次にアメリカとフランスがどのように作品中で描かれているのかを見ていく。前節で述べたように、『週刊少女フレンド』では、外国を舞台とする作品の中でアメリカ舞台の作品が最も多かったことがわかった。そのなかでもアメリカが身近に描かれていることが特徴としてあげられる。例えば、1969年連載の「ハリケーンむすめ」（杉本啓子）では、オートバイが好きな高校1年生の森本みちるが、アメリカのグロリア高校へ留学する。1971年の「お蝶でござんす」はやくざの一人娘、山本蝶がアメリカのセントポール学園に留学して人気者となり、友人と騒動をまきおこすという、日本人学生の留学による海外移住が描かれている。1970年代は語学留学の始まりの時代といわれ⁴⁾、大学生を中心として旅行気分留学するのがブームとなっていた。英語習得が目的であったためアメリカが舞台として選ばれることが多く、少女たちの憧れが反映されていることがわかる。

また、日本が舞台でも海外からのゲストを迎える作品や、海外に行く可能性のある物語も散見される。例えば1967年の連載作品「バッチリいっちゃん」（今村ゆたか）では、父の会社の大事なお客様としてアメリカ人男性が一週間日本に滞在し、文化的差異から起こる行き違いを解決する話が描かれる。1969年の連載作品、「先生はミニスカートが大好き」（まんが・大和和紀、原作・メラ松本）では桂強四郎の勤める古めかしい校風の明星中に、アメリカから美人のジョージ先生がやってくる。1971年の「花よめ先生」（里中満智子）では、新任の体育教師、花村花子がアメリカからの留学生エディにプロポーズされる。同年の「アテンションプリーズ」（細川知栄子、原案：上條逸雄）はスチュワーデスを目指す美咲洋子の物語で、アメリカに限らず日本と海外を行き来する。1970年の「女の子のなりたい職業調査の結果ベストテン」では、①スチュワーデス ②デザイナー ③先生 ④看護婦 ⑤タレント ⑥ジャーナリスト ⑦マンガ家 ⑧小説家 ⑨婦人警官 ⑩美容師となっており⁵⁾、この作品でも少女の憧れが描かれていることがわかる。

今回扱った『週刊少女フレンド』では、外国とのかかわりにおいて、①外国で繰り広げられる外国人が主人公のパターン、②外国舞台であっても日本人が主人公であるパターン、③日本舞台でも在住外国人が登場人物に加わるパターン、④日本舞台で日本人が主人公であるが海外に行くパターンの4つがみられた。外国、外国人が自

4) 「失敗しないための海外留学ガイド」：<http://ryugakuacchi.com/pl.html>

5) 『朝日新聞』1970年11月2日朝刊より

身と関係のある場所、人物として描かれる変遷が指摘でき、時代を経るにつれて外国との関係性を能動的に結ぶ行動が見られた。その中でもアメリカが作品の舞台となる外国として頻繁に使用されていることが分かった。

2-4 フランスの描かれ方の特徴

次にフランスがどう描かれていたかを考えていく。フランスが描かれた作品としては、1967年の「おしゃれな逃亡者」(原作：生田直親、絵：細川知栄子)があり、日本人絵描きを父に、フランス人のモデルを母に持つハーフのレミが無実の罪で入った感化院を脱走するという物語となっている。1971年の「モンシェリ CoCo」(大和和紀)は、繊維会社社長のフランス人の父と、京都西陣の生地問屋の日本人の母とのハーフで、ファッションデザイナーの卵であるココが活躍するという物語である。ここでも『週刊マーガレット』の調査結果と同様に、フランス=ファッション、おしゃれ、裕福というイメージが使われており、華やかなファッションの描写が毎号描き込まれている。さらにこの作品では「ココのチャームショップ」という企画があり、毎回1ページ程度を割いて、お勧めのファッションを具体的に描き紹介している。4月号では下北沢に実在する店の名前を挙げ、そこで購入したワンピースなどを値段付きで紹介している。実際にどこでどのくらい払えば手に入るのかが示唆され、ファッション誌のような役割を持った作品であったことがわかる。同じく1971年の「気になる逃亡者」は、悪い画商ギャバンから絵を取り戻したドミニク、ドミニクの友人のルル、ドミニクを追うギャバンたちが繰り広げるドタバタ劇で、怪盗ルパンを思わせるような設定のコメディである。1973年の「花のロマンス」(細川知栄子)では、将来の大スターをゆめみる真理は大スターの付人をしており、映画出演のためフランスへ呼ばれる機会を得るといふ、アメリカの描かれ方にみられた外国との能動的な関係性が描かれている。1975年の連載作品「ムッシュ・シンデレラ」(沢美智子)は、火事で不明となった幻の香水を発見し吹き付けると、美青年シナモンが女性に変わるというおとぎ話的な要素のある展開だ。こちらも「香水=フランス」というフランスのおしゃれなイメージを利用していることがわかる。1977年の「旅人のおくりもの」(あまねかずみ)は質素なブドウ農園の子どもが主人公の読み切りである。「フランス=ワイン」というイメージからであるが、裕福さやおしゃれさは描かれていない。

このように、『週刊少女フレンド』で描かれたフランスのイメージとしては、やはり「おしゃれ」「裕福」というキーワードがあげられるが、『週刊マーガレット』に描かれたフランスイメージよりも、コメディタッチであったり、比較的質素なイメージで用いられているという差異があった。

今回『週刊少女フレンド』における外国を舞台とする作品についてみてきたが、『週刊マーガレット』と比較したところ、外国舞台の割合はほぼ同じであったが、内訳としてアメリカが舞台としてより多く取り上げられていた。またアメリカ、フランス以外の「西洋」の国が描かれることも非常に少なかった。このことから、『週刊少女フレンド』は「アメリカ志向」を持っていたといえる。また外国との関わり方が時を経るにつれより身近に、直接的に自身が体験するものとして描かれるという変化が見られた。フランスに関しては、『週刊マーガレット』にて大人気作となった「ベルサイユのばら」のような大河歴史ロマンとは異なり、比較的現実的な日常生活が描かれる傾向があり、フランスといっても二誌でそのイメージに違いがみられた。それにはライバル雑誌との差異化、棲み分けなどが考えられ、読者も自身の志向で雑誌を選んでいたことが考えられる。

前稿では、少女文化の形成については領域横断的な調査が必要なことを述べたが、今回通時的な縦軸に加え、ジャンルの広がりという横軸からも「外国」イメージを分析したことで、より立体的に少女マンガ雑誌、ひいては少女文化を考察することができた。

3. 少女マンガ雑誌の多様性

3-1 『週刊少女フレンド』の特徴とは

前章でみたように、『週刊少女フレンド』と『週刊マーガレット』の相違点としては、アメリカ舞台の作品とフランス舞台の作品の割合の違いが指摘できる。『週刊マーガレット』と比較すると、『週刊少女フレンド』はアメリカ舞台の作品が多く、フランスも含めたヨーロッパ舞台の作品が相対的に少ない。『週刊マーガレット』や『週刊少女コミック』などに色濃くみられる、竹宮が指摘したような「ヨーロッパ志向」がみられないのである。ま

た、外国としてはアメリカ舞台の作品数が最も多く、『週刊少女フレンド』は「アメリカ志向」といえるが、読者が抱くイメージとしては、外国舞台の作品の印象はそれほど強くないと考えられる。

その理由として、『週刊少女フレンド』の看板作家の代表作は、日本を舞台に描かれた作品が比較的多いことがあげられる。1960年代から活躍する細川知栄子は外国を舞台に描くことも多かったが、1970年代の同誌を支えた看板作家である里中満智子や庄司陽子、大和和紀らのこの時期の代表作は、「あした輝く」「アリエスの乙女たち」（里中）、「思春期」「生徒諸君！」（庄司）、「ラブ・バック」「はいからさんが通る」（大和）など日本を舞台にした作品が多くなっている。1970年代の『週刊マーガレット』の看板作家の一人であった池田理代子では、「ベルサイユのばら」や「オルフェウスの窓」などヨーロッパを舞台に描く作品が代表作になっているのとは対照的である。

里中や庄司が得意とした「愛」とは何であるかを真正面から問うシリアスな青春群像は、1964年と1968年にそれぞれ若くしてデビューした里中や庄司らが、この10年足らずの間にどれほど早いスピードで進化したか、その到達点を示しているといえるだろう。デビュー当時の絵柄や物語とは大きく異なる成熟した作風へと変化を遂げている。複数の登場人物がそれぞれに困難を抱え、悩みながら成長する姿に共感しながら、読者である少女たちは、さまざまな生き方や「愛」のあり方があることを学んでいく。それらの作品は、当時の読者にとって人生の「教科書」のような役割を果たしていたと考えられる。

3-2 新たな世代の登場

こうした看板作家たちの活躍のなかで、新たな世代の台頭を感じさせたのが吉田まゆみの登場である。『週刊少女フレンド』において、1973年に投稿作品が入選してデビューした吉田は、「おはようポニーテール」（1977年1月）、「新・からふる STORY」（1977年10月）など、ふわふわとした柔らかい線で女子中高生の日常を描き、読者の共感を得た。吉田が読者と交流する「大好評るんジョッキー MAYU&YOU」というコーナーが設けられるなど、1977年にはすでに『週刊少女フレンド』誌上において人気作家となっていることがわかる。

「大好評るんジョッキー MAYU&YOU」は、次号から始まる吉田の4連作「からふる STORY」に合わせたのか、2ページ見開きで企画されている（1977年4月5日号）。そのなかで吉田は、読者から「まゆ先生」「まゆちゃま」などと呼びかけられ、自分の部屋の間取り図を載せたり、「まゆちゃまの好きな IVY ファッションを教えてください」といった要望を受けたり、以前の内容について「図に乗りすぎ」といった批判を受けるなど、読者たちと少し年上の姉や友達のような親しいやり取りを展開している。

吉田が里中満智子や大和和紀のことを「大先輩」と呼んでいるように、里中と大和とともに1948年生まれ、吉田は1954年生まれで6歳の差がある。1977年当時、23歳の吉田は読者との年齢も近い。同時期に里中が連載していた、愛人の子どもが本妻の子どもと仕事や恋愛を競い、葛藤しながら成長する「愛の時代」のようなドラマティックな作品とは異なる、シリアスな事件などとは縁遠い何気ない日常生活を舞台に、身近な少女の心理を丁寧に描きだす作品を連載し、読者の共感を得て人気を博していったことが想像できる。

この新しい作品の潮流は、『週刊少女フレンド』だけでなく、ほかの少女マンガ誌でも起こっている。『りぼん増刊号』では、1972年におとめチックマンガの代表的作家といえる陸奥 A 子がデビューしており、続く1973年には『週刊マーガレット』にて岩館真理子がデビューしている⁶⁾。宮台ほか（1993）は、少女マンガにおける世界観に大衆小説的（波乱万丈）、私小説・中間小説的（これってあたし！）、西欧純文学的（高踏派）という3つの流れがあるとし、1973年から1977年にかけてそれらがはっきりと分化したと述べる。宮台らは、おとめチックマンガの作品群を、少女たちの等身大の日常を描いた、私小説・中間小説的な「岩館（真理子）領域」としており、二十四年組による文学性の高い「萩尾（望都）領域」のマンガや、旧態依然とした娯楽志向の大衆小説的な「里中（満智子）領域」のマンガと一線を画していたと述べている。

この点について難波は、読者の分化との相関だけでなく、送り手側からみた雑誌の分類として、「大衆小説的＝『なかよし』＝講談社系、私小説的＝『りぼん』＝集英社系、純文学的＝『少女コミック』＝小学館系」という差異があり、出版社間の差別化戦略とも関係していたのではないかと指摘した（難波 2001:200）。

6) 陸奥 A 子は吉田まゆみと同じ1954年生まれであり、岩館真理子はその少し下の1957年生まれとなっている。この3人はほぼ同世代であるといえる。

ただし、すでに述べたように『りぼん』の陸奥 A 子、『週刊マーガレット』の岩館真理子、『週刊少女フレンド』の吉田まゆみと、少女マンガ誌を代表するそれぞれの雑誌で、それまでとは違う感覚を読者と共有できるような、柔らかい線で「おとめチック」な日常を描く作家が、ほぼ同時期に登場してきたことがわかる。その背景の一つとしては、作家の世代交代があげられるだろう。戦後の第一次ベビーブームに生まれた「団塊の世代」(いわゆる「二十四年組」)の作家たちも30歳前後を迎えており、中高生を対象とした少女マンガ雑誌としては世代交代の時期を迎えていたと考えられる。

少女マンガにおける世界観に異なる潮流が生まれてきた背景としては、読者の分化や出版社間の差別化戦略、作家の世代交代など複数の要因が考えられるが、少女マンガ雑誌について考える際に最も重要なことは、多くの雑誌においてこれらの異なる世界観を持つ作品群が、同時に掲載されているという点である。1960年代から1970年代にかけてのこの時期は、少年誌でも活躍する男性作家、戦前生まれの女性作家、ベビーブーム世代の女性作家、その下のおとめチック世代にあたる女性作家たちと、幅広い世代の作家たちが一つの雑誌のなかで同時に活躍するという状況がみられた。『週刊少女フレンド』においても、「愛」とは何かを問う里中や庄司の作品、ふわふわと軽く共感させる吉田の作品のほか、戦前生まれのわたなべまさこによる異色のサスペンス、杉本啓子による怪奇ロマン(恐怖シリーズ)、おかのきんやによるギャグマンガなど、多種多様な作品がみられる。

読者は1冊の雑誌を通して、世界観の異なるさまざまな物語、さまざまなタイプの登場人物や異なる考え方に触れる機会を得ることが可能になる。少女マンガ雑誌の魅力は、何よりもこうした多様性にあるのではないだろうか。

おわりに

本稿では、前回の『週刊マーガレット』と今回の『週刊少女フレンド』を比較しながら考察することで、1960年代から1970年代にかけての少女マンガ雑誌の変化をより立体的に明らかにすることができた。ページ構成の変化からは、1960年代から1970年代にかけてのこの時期は、少女マンガ雑誌の魅力が、ページ構成の多様性から、マンガの内容自体の多様性による魅力へと変化していった時期であることが確認できた。

次稿では、竹宮ら「ヨーロッパ志向」の作家が活躍した『週刊少女コミック』(小学館)を対象とし、引き続き調査を進める予定である。

引用・参考文献

- 佐藤卓己編、『青年と雑誌の黄金時代——若者はなぜそれを読んでいたのか』、岩波書店、2015年。
- 杉本章吾、「少女マンガ誌から少女向け総合誌への変容——2000年代以降の『ちゃお』における少女マンガの位相」『文藝言語研究』、第68号、pp.1-30、筑波大学大学院人文社会科学部研究科、2015年。
- 竹宮恵子、『少年の名はジルベール』、小学館、2016年。
- 難波功士、「『少女』という読者」『マンガの社会学』(宮原浩二郎・荻野昌弘編著)、世界思想社、2001年。
- 増田のぞみ・猪俣紀子、「少女マンガ雑誌における「外国」イメージ——1960～1970年代の『週刊マーガレット』分析より」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』、第52号、2016年3月。
- 宮台真司・大塚明子・石原英樹、『サブカルチャー神話解体——少女・音楽・マンガ・性の変容と現在』、PARCO出版、1993年。
- 吉田則昭・岡田章子編、『雑誌メディアの文化史——変貌する戦後パラダイム』、森話社、2012年。
- 米沢嘉博、『戦後少女マンガ史』、筑摩書房、1980=2007年。